駒澤地理 No.50 pp.55～68, 2014
Komazawa Journal of Geography

戦後日本の宗教地理学（続）
――宗教地理学文献目録の分析を通じて――

小田匡保*

Geography of Religion in Postwar Japan (2)

ODA Masayasu

本稿は，『地理学文献目録』第１集～第10集を分析した小田（2002）の続編として，同目録第11集～第12集から1997～2006年の宗教地理学文献目録を作成し，その数量的分析から当該時期の宗教地理学の動向を検討した。その結果，①宗教地理学の文献数が引き続き増加していること，②イスラム教関係の地理学文献が少数ながら増えていること，③地理学における聖地・聖域研究，祭礼研究が急増していること，④若手研究者が輩出し，中堅研究者とともに活動の中心になっていることなどが明らかになった。

キーワード：宗教地理学，『地理学文献目録』，イスラム教，聖地・聖域，祭礼，研究世代
Keywords: geography of religion, *Bibliography of Geography*, Islam, sacred place, festival, study generation

Ⅰ．はじめに

筆者は，かつて「戦後日本の宗教地理学」と題する拙論（以下，「前稿」）を記したことがある[1)]。前稿では，人文地理学会編『地理学文献目録』第１集～第10集を資料にして宗教地理学の文献目録を作成し，それを数量的に分析して，1945～1996年における日本の宗教地理学の動向を検討した。本稿はその続編であり，その後刊行された『地理学文献目録』第11集～第12集[2)]にもとづいて，1997～2006年の動向を見ようとするものである。日本の宗教地理学の展望論文は，筆者以外にも，近年，松井によって何度か書かれているが[3)]，本稿は，前稿と同じく，数量的分析によって考察を行なう。

Ⅱ．宗教地理学文献目録の作成

宗教地理学文献目録作成の手順は前稿と同様である。『地理学文献目録』第11集～第12集から宗教関係の地理学文献を拾い上げるが，前稿で指摘した1996年以前の動向との比較ができるよう，リストアップの基準は同じとする。すなわち，①非地理学者の文献は除外する。②非地理学者の文献でも，地理学の雑誌・単行本に掲載されたものは採録する（ただし，後の分析対象からははずす）。③地理学者の書いた宗教地理学的内容の文献であっても，論文や本のタイトルが宗教的でない場合は除外する。

以上の基準に基づき確認できた宗教地理学の文献数は182である。このうち，地理学者によるものが176，非地理学者のものが６である。また，1996年以前の『地理学文献目録』を見直し，イスラム教関

*駒澤大学文学部地理学教室

係を中心に，判断に迷って除外していた文献[4] や見落としていた文献を12追加した（今永 1993，岩井 1989，岩村 1956，片倉 1987；1989，小池 1996，後藤 1988，嶋田 1990，白井 1984，高橋 1960，寺阪 1994，内藤 1996）。追加分も含めた文献目録は，巻末に別表として掲げた。

Ⅲ．　宗教地理学文献目録の分析結果

1．文献数の推移

1996年以前分も含めた文献数の推移は，表1のとおりである。『地理学文献目録』2冊分の10年間をひとつの「期」とし，1945～1956年を第1期（この期のみ12年間），1957～1966年を第2期などとしている。1996年まで（第5期まで）文献数は増加傾向にあったが，1997年以降の10年間（第6期）も，引き続き増えていることが分かる。第6期を5年ごとに分けて見ても，1997～2001年に比べて2002～2006年は文献数が増加している。

2．宗教別文献数

1996年以前（第1～5期）と1997年以降（第6期）の宗教別文献数の割合は，表2のとおりである。文献追加分があり，また一部の文献の分類を修正したので，1996年以前の値は前稿と異なる。神道，修験道・山岳信仰文献の割合の増加，仏教，民間信仰・アニミズムの割合の減少傾向は見られるが，第5期以前にも多少の増減はあり，第5期以前から続く大きな変化はない。ただし，かつてほとんどなかったイスラム教関係の文献が，少数ながら，近年増えていることは指摘できる。1996年以前の文献のほとんどは第5期であり，第6期に続いている。これは，近年の高校地理教科書におけるイスラム教関係の記述の増加[5] や，ひいては社会におけるイスラム教への関心の高まりとも軌を一にする。なお，信者数等と比べて，修験道・山岳信仰の割合が高いこと，逆に新宗教の割合が低いことは，前稿で述べた。

表1　宗教地理学文献数の推移

年代		地理学者	非地理学者	合計	
第1期	1945～51 1952～56	3 10	1 2	4 12	16
第2期	1957～61 1962～66	33 15	3 1	36 16	52
第3期	1967～71 1972～76	39.8 32.5	1.2 2.5	41 35	76
第4期	1977～81 1982～86	45 54.5	5 7.5	50 62	112
第5期	1987～91 1992～96	68.5 69	5.5 3	74 72	146
第6期	1997～2001 2002～06	77 99	1 5	78 104	182
合計		546.3	37.7	584	584

注：端数は，共著の場合に按分しているためである。

表 2　宗教別文献数

宗教	1945～1996年		1997～2006年		合計	
	文献数	比率(%)	文献数	比率(%)	文献数	比率(%)
神道	74	19.7	44	25.0	118	21.4
仏教	85	22.6	29	16.5	114	20.7
修験道・山岳信仰	60	16.0	34	19.3	94	17.0
民間信仰・アニミズム	62	16.5	24	13.6	86	15.6
キリスト教	26.5	7.0	11	6.3	37.5	6.8
イスラム教	6	1.6	8	4.5	14	2.5
新宗教	7.5	2.0	3	1.7	10.5	1.9
その他・複数宗教・宗教一般	55	14.6	23	13.1	78	14.1
合計	376	100.0	176	100.0	552	100.0

注 1：非地理学者のみによる文献は除いたため，表1と合計が異なる。
注 2：「社寺」のように明確に 2 宗教に分かれる場合は，2 つに按分している。

3．テーマ別文献数

研究テーマ別文献数の推移は，表 3 のとおりである。表 3 でも，文献追加分や，一部文献の分類修正により，第 5 期以前（1996年以前）の値は前稿と異なっている。また，研究テーマも後述のように見直しを行なった。

伝統的な宗教都市・宗教集落の研究は相変わらず多く，第 6 期には11文献あるが，約半分の 5 は歴史地理的な寺内町研究である（天野論文と金井の『寺内町の歴史地理学的研究』[6]）。第 5 期まで多かった門前町や山岳宗教集落を扱ったものはわずかであり，研究の停滞を感じる。

巡礼・参詣の研究は第 4 期・第 5 期と増加した。その代表は田中の研究であった。第 6 期になって文献数が減少に転じているのは，田中が2002年に夭折した影響が現れていると考えられる。しかし，それでも15（うち田中は 4 で，遺稿集『聖地を巡る人と道』[7] を含む）という多数の文献が出されており，依然として研究がさかんであると言える。その中心は四国遍路に関する森の研究であり，彼は成果を

表3　研究テーマ別文献数の推移

研究テーマ	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	合計
宗教都市・宗教集落	2	11	14	18	10	11	66
巡礼・参詣	0	3	2	11	20	15	51
墓制	0	0	3	3	22	8	36
宗教分布・信仰圏	0	2	4	2	6	17	31
村落の宗教組織	1	10	9	9	3	8	40
絵図類	1	3	0	4	12	9	29
山岳聖域	0	0	2	9	9	9	29
聖域	0	1	2	13	18	28	62
祭礼	0	0	0	0	0	15	15

注：同一の文献が上記の複数のテーマにまたがることもある。他方，上記のいずれのテーマにも属さない文献も多い。

『四国遍路の近現代』[8] にまとめている。

墓制は，第5期に急増した研究テーマであるが，第6期には減少して8文献となっている。第5期に多数の論文を書いた中川が，1997年に『ルイジアナの墓地』[9] を公刊して以降，この分野の成果を出さなくなったことの影響が大きいが，それ以外の書き手も文献数が減少している。

宗教都市・宗教集落とならんで古くからのテーマである宗教分布・信仰圏の研究は，第5期に増加に転じ，第6期でも増えて17文献が確認できる。活動の中心は松井の金村別雷神社信仰圏研究であり，彼は成果を『日本の宗教空間』[10] にまとめている。その他にも，筒井の太平山・鳥海山研究のように信仰圏の論文がいくつか出され，また岩鼻は『出羽三山信仰の圏構造』[11] を公刊して，信仰圏への関心が高まった時期と言える（ただし，2007年以降は，それほどでもないと感じられる）。宗教分布についても，小田の仏教宗派分布研究などがある。

村落社会との関わりで宗教組織を扱う研究は，村落社会地理学への関心の減少と連動してか，第5期には少なくなっていた。しかし，第6期にはまた増えて8文献ある。代表は福井県での藤村の研究である。

絵図類を資料・対象とする研究は，前稿でも述べたように，戦後すぐには仏教系世界図の研究が行なわれたが，第2期で姿を消す。それに代わって，第4期に，寺社境内・領域図，参詣曼荼羅，巡礼絵図のように聖域を描写した絵図類の研究が現れ，第5期に急増する。第6期に入ってこのブームは沈静化しているが，依然として岩鼻の参詣曼荼羅研究など9文献が見られる。また，新しい傾向として，国絵図など広域を描いた絵図・古地図における聖域の描写に着目した研究が看取できる。

第4・5期に主に長野・小田によって行なわれた山岳聖域の研究は，第6期も小田の他，中野などによって，聖地や道，入峰ルートなどの研究が行なわれている（9文献）。中野は2002年に『葛城の峰と修験の道』[12] を著している。

山岳聖域の研究に類似のものとして，上述の寺社境内・領域図や参詣曼荼羅の研究がある。霊山の参詣曼荼羅の研究は，山岳聖域研究とも言いうるものである（上記の山岳聖域研究にはカウントしていない）。また，第6期には，川合の富士山研究や津川の宗教的ランドマーク研究など，聖地や聖域を意識した文献が12も出現している（第5期以前にも聖地・聖域に関する研究はいくつかあったが，ほとんどは非地理学者によるものである）。山岳聖域の研究と聖域の絵図の研究（巡礼絵図と墓地の絵図〔第5期：3，第6期：2〕を除く），聖地・聖域の研究を，あらためて「聖域」というくくりで合計すると，第4期以降急増し，第6期には28文献にものぼることが分かる。聖地・聖域はスケールも内容も多種多様で，しかも近年は，伝統的宗教の枠内に収まらない「パワースポット」やアニメなどの非宗教的聖地が社会的に注目を集めているが，地理学的研究方法が確立しているとは言いがたい。しかし，研究意欲が高まっていることは確かであり，今後の進展が望まれる。

祭礼の研究15文献は，第6期になって一気に大量に現れたものである。第5期以前も，民間信仰的な祭祀の研究や古代祭祀の研究，「よさこい祭り」のような非宗教的祭りの研究はあったが，本稿の「祭礼」の集計からは除外している（民間信仰的な祭祀の研究や古代祭祀の研究は，目録には含めている）[13]。「祭礼」と「祭祀」の区別は難しいが，ここでは，多数の参加者がいる大規模な祭りを「祭礼」と措定している。祭礼研究者の代表は，文献数で考えれば，近世の都市祭礼を扱った渡辺であるが（他には複数の文献を著している執筆者はおらず，卒業論文研究の公刊が目につく），歴史地理的研究であることもあって，スタンダードモデルになりきれていないと思われる。（社会学や文化人類学でも着目される）祭礼を担う住民組織（地域的社会集団）や地域アイデンティティとの関わり，祭礼そのものの空間性などが地理学的研究のポイントと考えるが，非宗教的祭りも含めて，研究の枠組みが確立される必要がある。

表４　著者別文献数

著者名	1945～1996年	1997～2006年	合計
小田匡保	14	14	28
大越勝秋	21	0	21
田中智彦	15	4	19
松井圭介	5	14	19
関口靖之	15	2	17
長野　覺	15	1	16
岩鼻通明	10	5	15
中川　正	12	3	15
内田秀雄	14	0	14
岩田慶治	8	1	9
千葉徳爾	8.5	0	8.5
稲田道彦	5	2	7
筒井　裕	0	7	7
舩杉力修	1	6	7
天野太郎	1	5	6
金井　年	5	1	6
藤村健一	0	6	6
三木一彦	3	3	6
森　正人	0	6	6

注１：合計文献数が6以上の著者のみ。
注２：文献数が同一の場合は，五十音順に並べた。

４．著者別文献数

次に，著者別文献数は表４のとおりである。表には，第１～６期（1945～2006年）の合計文献数が６以上の著者のみ示した。全体では，文献数28の小田をトップに，大越，田中・松井，関口，長野，岩鼻・中川，内田という順位になる。第６期（1997～2006年）のみに限れば，小田・松井が第１位で，以下，文献数７の筒井，文献数６の藤村・舩杉・森，文献数５の天野・岩鼻・川合（山口）と続く。

前稿では，第１～５期の時期別特徴を著者の面から概観したが，それにならえば，第６期は，中堅研究者の持続と若手研究者輩出の時期と言える。第５期以前から活動していた岩鼻・小田・松井らは研究を継続しているが，同時期に活躍していた田中は2002年に惜しくも夭折した。彼らに加えて，川合（山口）・筒井・藤村・森らの若手研究者が第６期に現れる。川合（山口）は富士山をはじめとする聖地の研究，筒井は太平山・鳥海山信仰の研究，藤村は村落社会の宗教研究，森は四国遍路の研究を行なっている。

５．著者生年別の検討

生年別の著者数は表５，著者生年別の文献数は表６のとおりである。第１～６期（1945～2006年）の合計では，1950年代生まれが著者数・文献数とも最多で，特に文献数における比率の高さが目につく。ただし，第６期（1997～2006年）については，1970年代生まれの著者数・文献数が最も多い。図１は，著者生年別文献数の推移で，第６期は，1970年代生まれと1960年代，1950年代生まれの文献数で全体の４分の３以上を占めていることが分かる。さらに，第６期の「不明」の約半数は大学院生や学部卒業

表5　生年別著者数

生年	1945～1996年		1997～2006年		合計	
	著者数	比率(%)	著者数	比率(%)	著者数	比率(%)
～1899	3	1.9	0	0.0	3	1.3
1900～	14	8.7	0	0.0	14	6.1
1910～	17	10.6	0	0.0	17	7.4
1920～	21	13.0	5(1)	5.3	22	9.6
1930～	15	9.3	1(1)	1.1	16	7.0
1940～	15	9.3	10(6)	10.6	21	9.2
1950～	33	20.5	19(9)	20.2	42	18.3
1960～	14	8.7	14(8)	14.9	22	9.6
1970～	4	2.5	21(19)	22.3	23	10.0
1980～	0	0.0	2(2)	2.1	2	0.9
不明	25	15.5	22(22)	23.4	47	20.5
合計	161	100.0	94(68)	100.0	229	100.0

注1：1997～2006年の著者数欄の（　）は，この時期に初めて登場する著者数で内数。
注2：合計欄の著者数は，1945～1996年の著者数と，1997～2006年の新規著者数の和。
注3：松尾ほか（2006）は，共著者が多数なので，著者数1，著者生年不明とした。

表6　著者生年別文献数

著者生年	1945～1996年		1997～2006年		合計	
	文献数	比率(%)	文献数	比率(%)	文献数	比率(%)
～1899	4	1.1	0	0.0	4	0.7
1900～	35.5	9.6	0	0.0	35.5	6.5
1910～	59.5	16.1	0	0.0	59.5	10.9
1920～	54.4	14.7	7	4.0	61.4	11.2
1930～	27.9	7.5	2	1.1	29.9	5.5
1940～	19.3	5.2	9.5	5.4	28.8	5.3
1950～	99.2	26.8	38	21.6	137.2	25.1
1960～	36	9.7	47.3	26.9	83.3	15.2
1970～	6	1.6	50.3	28.6	56.3	10.3
1980～	0	0.0	1	0.6	1	0.2
不明	28.5	7.7	20.8	11.8	49.3	9.0
合計	370.3	100.0	176	100.0	546.3	100.0

注：共著の場合の端数があるため，各項目の数値の和と合計の数値とが異なる場合がある。

論文の著者で，大半は1970年代生まれと思われ，1970年代生まれの著者数やその文献数は，実際はもっと多くなると推定される。第6期は中堅研究者の持続と若手研究者輩出の時期と上述したが，著者生年別の検討によっても，若手と中堅が活動の中心であることが明らかである。これに対して，第2期や第3期では，当時の若い世代の占める割合は低く，中堅とシニア世代が中心であった。なお，1930年代，1940年代生まれの著者の少なさについては，前稿でも指摘し，当該世代が大学で地理学を学び始めた頃

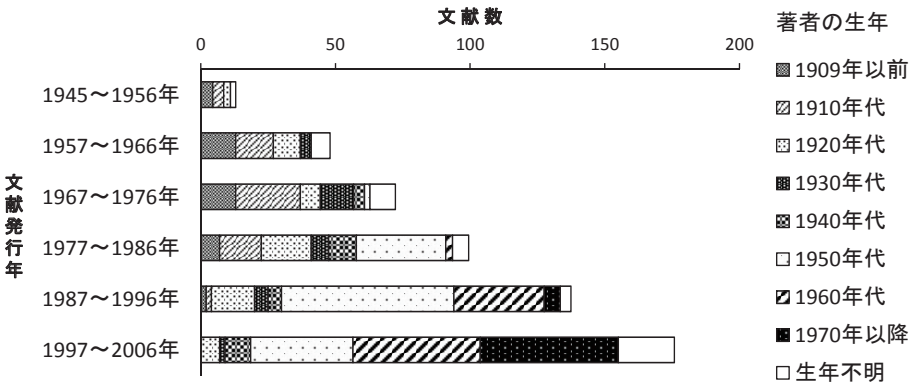

図１　著者生年別文献数の推移

に，宗教を研究テーマとしにくい雰囲気があったのではないかと記した。社会経済史学が強かった影響とも思われるが，その後も妙案は得ていない。

表７は，各世代ごとに，文献発表時の年齢別に文献数を集計したコーホート分析である。同様の表は前稿にも掲出しており，各生年期間の中央に仮の生年を設定して文献発表時の年齢を想定する作成方法は前稿と同じである。1900年代～1920年代生まれが50～60歳代に最も活動していることも指摘済みであるが，第６期分を追加した本稿の集計結果からは，元来，宗教地理学研究者の少ない1940年代生まれも，50歳代になって文献数が少し増えていることが読み取れる（年齢効果が多少あると言える）。これに対して，1950年代～1970年代生まれは20～30歳代で大量の文献を発表しており，研究のスタート時から宗教地理学に関心を持っていることが分かる。

表７　著者生年別・年齢別文献数

生年期間	（仮生年）	文献発表時の年齢								合計
		12～21歳	22～31歳	32～41歳	42～51歳	52～61歳	62～71歳	72～81歳	82～91歳	
～1899	（1895）	＊	＊	＊	＊	0	3	1	0	4
1900～	（1905）	＊	＊	＊	4.5	10	12	7	2	35.5
1910～	（1915）	＊	＊	4	14	24	15.5	2	0	59.5
1920～	（1925）	＊	2.5	10	7.4	18.5	16	7	＊	61.4
1930～	（1935）	0	4	12.4	6.5	5	2	＊	＊	29.9
1940～	（1945）	0	4	10.3	5	9.5	＊	＊	＊	28.8
1950～	（1955）	2	33.2	64	38	＊	＊	＊	＊	137.2
1960～	（1965）	2.5	33.5	47.3	＊	＊	＊	＊	＊	83.3
1970～	（1975）	6	50.3	＊	＊	＊	＊	＊	＊	56.3
1980～	（1985）	1	＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊	1
合計		11.5	127.5	148	75.4	67	48.5	17	2	496.9

注１：仮生年は生年期間の中央に設定した。
注２：たとえば，仮生年1905年生まれが42～51歳で発表した文献数とは，1900～1909年生まれが第１期（1945～1956年）に発表した文献数を示す。
注3：＊は『地理学文献目録』データがないものである。

Ⅳ．おわりに

以上，本稿では，前稿の続編として，『地理学文献目録』第11集～第12集から1997～2006年（第6期）の宗教地理学文献目録を作成し，その数量的分析から当該時期の宗教地理学の動向を検討した。

前稿では記さなかった新たな知見としては，①第6期も，宗教地理学の文献数が引き続き増加していること，②かつてほとんどなかったイスラム教関係の地理学文献が，第5期以降，少数ながら増えていること，③地理学における聖地・聖域研究，祭礼研究が第6期に急増していること，④若手研究者が輩出し，中堅研究者とともに第6期の活動の中心になっていることなどを指摘できる。

周知のように，『地理学文献目録』の刊行は第12集で終了した。したがって，前稿・本稿と続いた『地理学文献目録』にもとづく宗教地理学の動向分析も，これでとりあえず終わりとなる（もっとも，他の分析視角はありうる）。『地理学文献目録』に代わる目録がない以上，今後，宗教地理学文献目録の作成やその数量的分析は困難になるであろう。ただ，現在では，インターネットのデータベースでかなりの文献情報を入手することができる。オンラインで地理学雑誌の目次を閲覧するなどして，同種の宗教地理学文献目録を作成することは可能かもしれない。もし，本稿の続編が期待されるとするならば，このような試みも検討されねばならない。

〔付記〕本稿は，平成25年度駒澤大学公費在外研究（国内長期）の成果の一部である。

注

1）小田匡保「戦後日本の宗教地理学：宗教地理学文献目録の分析を通じて」駒澤地理38，2002，21-51頁。
2）人文地理学会文献目録編集委員会編『地理学文献目録』第11集，古今書院，2004。人文地理学会文献目録編集委員会編『地理学文献目録』第12集，古今書院，2009。
3）たとえば，松井圭介「宗教地理学の動向と課題」（高橋伸夫編『21世紀の人文地理学展望』古今書院，2003）447-459頁。Matsui, Keisuke, Recent Trends in the Geography of Religion in Japan, *Geographical Review of Japan*, 81 (5), 2008, 311-322.
4）前稿では，文献名に「イスラム」「イスラーム」とあっても，必ずしもイスラム教の内容ではないと考え，目録作成から除外していた。
5）小田匡保「日本の宗教を地理的に見る」歴史と地理598（地理の研究175），2006，9-18頁。
6）金井年『寺内町の歴史地理学的研究』和泉書院，2004。
7）田中智彦著，田中智彦論文集刊行会編『聖地を巡る人と道』岩田書院，2004。
8）森正人『四国遍路の近現代：「モダン遍路」から「癒しの旅」まで』創元社，2005。
9）中川正『ルイジアナの墓地：死の景観地理学』古今書院，1997。
10）松井圭介『日本の宗教空間』古今書院，2003。
11）岩鼻通明『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院，2003。
12）中野栄治『葛城の峰と修験の道』ナカニシヤ出版，2002。
13）文化人類学など他の学問分野の著者による祭礼研究も『地理学文献目録』には収録されているが，採録基準に従って，本稿の目録には含めていない。

Geography of Religion in Postwar Japan (2): An Analysis of the Bibliography

ODA Masayasu*

This paper follows the author's previous article (2002) which analyzed *Bibliography of Geography* Vol. 1 to 10. He makes a bibliography of geography of religion in Japan from 1997 to 2006 based on the *Bibliography* Vol. 11 and 12, and statistically examines some research trends in the field in that period.

New findings in this paper are as follows:

1. The volume of the books and papers related to geography of religion has continued to increase in this period, too.
2. Islamic study has increased, although the number is very small.
3 Geographical studies of sacred places and festivals have increased rapidly.
4. Younger generation born in the 1970s and 1960s is most active, and is followed by the middle ages in the 1950s.

Keywords: geography of religion, *Bibliography of Geography*, Islam, sacred place, festival, study generation

* Department of Geography, Komazawa University

別表　宗教地理学文献目録（続）

著者	発行年	タイトル	掲載誌・巻号／所収書名（発行所）／発行所	頁	備考
相澤亮太郎	2005	阪神淡路大震災被災地における地蔵祭祀―場所の構築と記憶	人文地理57-4	62-75頁	
天野太郎	1998	寺内町の概念と囲郭の機能	地域と環境1	36-43頁	
天野太郎	2000	淀川中流域における寺内町の展開―枚方寺内町プランの復原を中心として	『地図と歴史空間』（大明堂）	232-242頁	
天野太郎	2000	淀川流域における寺内町の立地選定に関する一考察	地域と環境3	81-90頁	
天野太郎	2002	近代植民地都市釜山の形成と日本系宗教施設	地域と環境（京都大学）4	1-28頁	
天野太郎	2003	北陸寺内町の展開―越中国勝興寺寺内町プランを中心として	歴史地理学45-2	1-24頁	
池内　泰	2006	神奈川県・江の島における天王祭の成立とその背景―祭礼にみる祭祀空間の考察を通じて	人文地理58-5	1-20頁	
石本東生	2002	エウセビオスの『教会史』における自然環境	奈良大地理8	1-11頁	
稲田道彦	1997	他界観念と文化地理学	『地理学「知」の冒険』（古今書院）	148-164頁	
稲田道彦	2005	英国南部の墓地の変化と宗教的態度	歴史地理学47-1	85-94頁	
（今永清二）	1993	アユタヤのイスラム共同体	地誌研年報3	1-21頁	追加分
岩井　純	1989	日本におけるイスラームの状況	法政地理17	45-50頁	追加分
岩田和己	1999	富山県における不吹堂と強風について	自然と社会65	31-39頁	
岩田慶治	2005	『木が人になり，人が木になる。―アニミズムと今日』	人文書館		
岩鼻通明	1997	立山曼荼羅研究の成果と課題	山岳修験20	15-20頁	
岩鼻通明	1999	観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌（第３報）	季刊地理学51-1	19-27頁	
岩鼻通明	2000	粉河寺参詣曼荼羅にみる聖域空間の表現	『地図と歴史空間』（大明堂）	428-435頁	
岩鼻通明	2002	絵図にみる霊場寺院の他界観	『中世出羽の宗教と民衆』（高志書院）	277-290頁	
岩鼻通明	2003	『出羽三山信仰の圏構造』	岩田書院		
（岩村　忍）	1956	イスラムの社会	『現代地理講座６』（河出書房）		追加分
上杉和央	1999	飛鳥・白鳳期における寺院の立地について	史林82-6	125-149頁	
内田忠賢	2003	祭り―暮らしの中の祭りと地域への展開	『暮らしの中の民俗学２』（吉川弘文館）	152-176頁	
遠藤由紀子	2006	屯田兵村における神社の創立由縁とその類型―石狩川上～中流域の場合	歴史地理学48-5	1-18頁	
大浦瑞代	2000	富山県南砺地域の不吹堂祭祀にみる局地風の認知	歴史地理学42-1	29-46頁	
大島規江	2000	ムスリム系住民の社会空間の拡大―福祉国家オランダ・アムステルダムの事例	地学雑誌109-5	661-679頁	
大城直樹	1998	ナショナリズムと「民俗」の風景―八重山の御嶽のエピソード	『空間から場所へ』（古今書院）	144-161頁	
大城直樹	2000	墓地風水絵図『佳城絵図分金』について	神戸大学文学部紀要27	429-451頁	
（岡　宏三）	2005	絵図を通してみた門前町杵築（大社）	歴史地理学47-1	43-59頁	
小田匡保	1998	大和国絵図に描かれた大峰―山岳聖域に関する地理的知識伝播の一例	駒澤地理34	47-64頁	
小田匡保	1999	Geography of Religion in Japan since 1977	地域学研究（駒澤大学）12	27-32頁	
小田匡保	1999	Distribution of Christianity in Japan	The Pennsylvania Geographer, 37-1	17-32頁	
小田匡保	2000	ドイツ南部アルトエッティングへの徒歩巡礼―その現状を中心として	『巡礼研究の可能性』（岩田書院）	181-200頁	
小田匡保	2001	大和国絵図諸本の系譜について―大和国絵図に描かれた大峰・再論	歴史地理学43-5	1-20頁	
小田匡保	2002	戦後日本の宗教地理学―宗教地理学文献目録の分析を通じて	駒澤地理38	21-52頁	
小田匡保	2002	雑誌『神変』掲載の大峰四十二宿一覧史料について	地域学研究（駒澤大学）15	41-67頁	
小田匡保	2003	日本における仏教諸宗派の分布―仏教地域区分図作成の試み	駒澤地理39	37-58頁	
小田匡保	2003	雑誌『神変』掲載の大峰四十二宿一覧史料について（続）	地域学研究（駒澤大学）16	59-63頁	
小田匡保	2003	修験道教義における大峰	地理48-11	14-19頁	
小田匡保	2004	信仰圏研究の地理学的課題―松井圭介著『日本の宗教空間』を評して	駒澤地理40	105-120頁	
小田匡保	2004	近世後期における大峰の入峰ルート―八経ヶ岳付近の場合	交通史研究55	65-75頁	
小田匡保	2005	近代における大峰の入峰ルート―戦前期の聖護院の入峰を中心に	山岳修験36	25-39頁	
小田匡保	2006	Distribution of Buddhist denominations in Japan	地域学研究（駒澤大学）19	31-35頁	
小野田一幸	2001	近世刊行大坂図にみる千日墓所とその周辺	『絵図の世界と差別民』（大阪人権博物館）	73-106頁	

小野寺淳	2002	道中日記にみる東海道のイメージ―関東地方農村部からの伊勢参宮	交通史研究49	7-18頁	
小野寺淳	2005	伊勢参宮における講組織の変容―明石市東二見を事例に	歴史地理学47-1	4-19頁	
片倉もとこ	1987	異文化環境におけるムスリム―カナダにおけるアラブムスリム社会の形成	国立民族学博物館研究報告12-3	681-726頁	追加分
片倉もとこ	1989	異文化環境のアラブムスリム―ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムの事例研究	国立民族学博物館研究報告14-4	821-890頁	追加分
金井　年	2004	『寺内町の歴史地理学的研究』	和泉書院		
金坂清則	2001	絵図・地図に現れた鎮守の森	『鎮守の森は甦る』(思文閣出版)	107-132頁	
金子直樹	1997	岩木山信仰の空間構造―その信仰圏を中心にして	人文地理49-4	1-20頁	
金子直樹	1998	岩木山における参詣登山道の歴史的変遷	歴史地理学40-5	26-46頁	
金子直樹	2003	勝ち抜く行事―翼賛文化運動における祭礼行事・民俗芸能の「活用」	『郷土』(嵯峨野書院)	108-131頁	
賀納章雄	2003	沖縄県竹富島における伝統的作物アワの栽培存続とその背景―種子取祭との関係を中心に	農耕の技術と文化26	53-84頁	
樋根　勇	2002	『水と女神の風土』	古今書院		
樋根　勇	2004	進化するヒンドゥーの女神たち	地理49-6	33-38頁	
川合泰代	2001	富士講からみた聖地富士山の風景―東京都23区の富士塚の歴史的変容を通じて	地理学評論74A-6	349-366頁	
川合泰代	2003	聖地「富士山」の風景―江戸・東京の富士講からのまなざし	地理48-11	20-28頁	
川合泰代	2004	「聖なる風景」の復原方法についての一試論―富士講と富士山を例として	歴史地理学46-1	50-64頁	
川合泰代	2006	近世奈良町の春日講からみた「聖なる風景」―春日曼荼羅と儀礼の分析を通じて	人文地理58-2	57-72頁	
河島一仁	1999	浜松・鍛冶町の金山神社における「記憶」と装置に関する一試論	岐阜地理43	110-114頁	
河島一仁	2001	山城での稼場争論を通じてみた植田村・恵美須講の内部構造	『空間と移動の歴史地理』(立命館大学)	111-147頁	
河原典史	1998	三重県における漁村の盆行事―漁村空間と海上他界観をめぐる予察的考察	立命館文学553	125-155頁	
河原典史・渡抜貴史・赤石直美	2004	近代以降における生駒宝山寺の信仰圏―石造物からのアプローチ	京都民俗20・21	125-141頁	
神田孝治・小野田真弓	2005	世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録と和歌山県の観光・リゾート政策	和歌山地理25	71-79頁	
倉光ミナ子	1998	開拓地の形成と「花祭り」の再生―愛知県豊橋市「幸(みゆき)町」を事例に	人文地理50-4	67-79頁	
桑原康宏	2005	明治前期の神社合祀―和歌山県田辺市・西牟婁郡を中心にして	和歌山地理25	13-29頁	
(小池太郎)	1996	神社祭礼等の寄付金額からみた混住化地域の社会関係―埼玉県秩父郡横瀬町第14区を事例として	歴史地理学調査報告7	117-132頁	追加分
(後藤　明)	1988	イスラムの暦と生活時間	地理33-5	23-27頁	追加分
齋藤元子	1999	19世紀後半アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動	お茶の水地理40	33-38頁	
齋藤元子	2000	“アメリカ人女性宣教師の異教地報告”研究序説―Feminist Historiography of Geography への位置付けとして	お茶の水地理41	19-24頁	
阪野祐介	2003	新潟県・八海山を対象とした山岳信仰の展開―大崎口崇敬者の分布を中心に	歴史地理学45-5	1-18頁	
阪野祐介	2006	京都府旧佐賀村におけるカトリックへの集団改宗と農村社会	人文地理58-4	21-40頁	
佐々木高明	2006	『山の神と日本人』	洋泉社		
佐々木高弘	2001	民俗世界の地理学(6)　景観を見立てる神話	地理46-10	60-65頁	
佐藤由美子	1997	『天岩屋戸神話』におけるイニシエーションの構造	お茶の水女子大学人文科学紀要50	15-32頁	
佐野静代	2005	中近世における水辺の「コモンズ」と村落・荘郷・宮座―琵琶湖の「供祭エリ」と河海の「無縁性」をめぐって	史林88-6	845-878頁	
島崎博・P.L.Wagner	2005	Managing pilgrimage	人文地理57-2	69-79頁	
(嶋田義仁)	1990	トンブクトゥ―サハラ南端の交易・イスラム都市	地理35-7	38-45頁	追加分
清水静志	2000	鯨の墓・魚介の供養碑を訪ねて―捕鯨・鯨食文化からの主張	和歌山地理20	37-46頁	
(白井　桂)	1984	バングラデシュの家族―ダッカ在住のあるイスラム教徒の生活	地理29-9		追加分
須山　聡	2003	富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成―観光の舞台・工業の舞台	地理学評論76-13	957-978頁	
関口靖之	1998	兵庫県宍粟郡の近代神社の合祀	地理学報32	77-83頁	
関口靖之	2005	河内国北部の神社と地域	地理学報36	57-65頁	
関水博道	2004	祭礼を通して見る地域アイデンティティの形成―北海道江差町姥神大神宮渡御祭を例に	法政地理36	17-28頁	
千田　稔	2005	『伊勢神宮―東アジアのアマテラス』	中央公論新社		
高岡麻希子	2006	近代都市における盛り場と宗教施設―神戸新開地を事例に	兵庫地理51	39-48頁	

高橋健太郎	1998	回族の居住分布と清真寺の機能―中国寧夏回族自治区，都市と農村を比較して	駒澤大学大学院地理学研究26	27-45頁	
高橋健太郎	2005	中国・回族の聖者廟参詣と地域社会―寧夏回族自治区の事例	地理学評論78-14	987-999頁	
高橋　正	1960	中世イスラーム地理学再評価への試み	人文地理12-4		追加分
高橋美久二	2001	考古学から社叢をみると	『鎮守の森は甦る』(思文閣出版)	71-85頁	
田上善夫	2002	Some characteristics of shrine distribution in central Japan	Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University 37	51-60頁	
田上善夫	2005	富山県の霊場とその巡拝路の特色	富山地学地理学研究論集12	43-54頁	
竹村一男	2000	末日聖徒イエス・キリスト教会受容の地域的差異に関する研究―山形・富山地域における事例を中心に	地理学評論73A-3	182-198頁	
田中智彦	1999	道標・町石からみた高野街道―大阪狭山市史石造調査より	地方史研究49-4	25-29頁	
田中智彦	2000	巡礼と順礼―文献史料と納札からみた中世の西国巡礼の表記	『巡礼研究の可能性』(岩田書院)	69-96頁	
田中智彦	2002	道中日記にみる畿内・近国からの社寺参詣	交通史研究49	19-45頁	
田中智彦著，田中智彦論文集刊行会編	2004	『聖地を巡る人と道』	岩田書院		
田中理恵子	2002	沖縄コナベーション外縁部における墓制の変容―沖縄県読谷村波平地区を事例に	茨城地理3	19-33頁	
谷口美都子	2004	19世紀南オンタリオのグエルフにおけるタウン・プランニングとキリスト教	歴史地理学46-5	1-14頁	
津川康雄	1998	宗教的ランドマークとその要件―大観音像を例として	立命館地理学10	49-58頁	
津川康雄	1998	宗教的ランドマークの成立過程―大観音像を例として	地域政策研究(高崎経済大)1-1	87-101頁	
筒井　裕	1999	秋田県における太平山三吉神社の信仰圏の空間構造―講中を指標として	秋大地理46	27-32頁	
筒井　裕	2000	太平山信仰における講中活動の現況	秋田地理20	27-35頁	
筒井　裕	2001	鳥海山大物忌神社の信仰圏に関する地理学的研究	秋大地理48	1-8頁	
筒井　裕	2004	山岳信仰の神社における講組織の形成―国幣中社大物忌神社を事例に	歴史地理学46-1	32-49頁	
筒井　裕	2004	昭和中期における鳥海山山中への物資運搬―吹浦口ノ宮からの運搬を中心に	日本民俗学240	76-92頁	
筒井　裕	2004	明治期の山形県飽海郡における漁業者の鳥海山信仰に関する予察―吹浦口ノ宮所蔵資料の調査結果をふまえて	地域と環境(京都大学)5	115-128頁	
筒井　裕	2006	鳥海山大物忌神社吹浦口ノ宮所蔵資料に関する調査報告―明治期を中心に	地域と環境(京都大学)6	68-93頁	
寺阪昭信編	1994	『イスラム都市の変容―アンカラの都市発達と地域構造』	古今書院		追加分
轟　博志	1997	京都・祇園祭りにおける担い手の属性とその輩出地域	立命館地理学9	95-106頁	
豊田　薫	2000	横浜外国人墓地を訪ねる―日本の近代化につくした人びとのモニュメント	地理45-5	50-55頁	
内藤正典	1996	『アッラーのヨーロッパ ―移民とイスラム復興(中東イスラム世界8)』	東京大学出版会		追加分
内藤正典	2002	イスラーム世界―いま，何を知らねばならないか	地理47-1	42-47頁	
内藤正典	2003	中東地域とイスラーム―地理教育における基本的なパースペクティブ	地理月報477	1-4頁	
内藤正典	2004	『ヨーロッパとイスラーム―共生は可能か』	岩波書店		
内藤正典	2006	『イスラーム戦争の時代―暴力の連鎖をどう解くか』	日本放送出版協会		
中川　正	1997	『ルイジアナの墓地―死の景観地理学』	古今書院		
中川　正	2001	地域と霊の実在―1990年代におけるプロテスタント教会の地域観	人文論叢18	81-95頁	
中川　正	2003	聖地とは何か	地理48-11	8-13頁	
中島義一	2004	市神考	駒澤地理40	1-12頁	
中島義一	2005	市と市神	利根川文化研究27	1-8頁	
中條曉仁	2001	過疎山村における講集団の変化と村落社会―島根県仁多町阿井地区の事例	地理科学56-4	1-21頁	
中西和子	1999	城下町における寺院配置―寺町の防御機能の再検討	人間文化研究科年報(奈良女子大学大学院)	193-206頁	
中野栄治	2002	『葛城の峰と修験の道』	ナカニシヤ出版		
中野栄治	2006	葛城の峰と修験の道	山岳修験38	17-29頁	
長野　覚	2002	九州の山岳信仰―記・紀・万葉・風土記・式内社・経塚による	山岳修験30	1-22頁	
中村周作	1997	漁村と背域集落の関係―祭礼行事，とくに綱引きを例として	『地域文化を生きる』(大明堂)	45-64頁	
(中村雅俊)	1997	漆器業の虚空蔵信仰―伝統産業における信仰と技術伝承に関する民俗地理的一考察	ジオグラフィカ・センリガオカ3	87-112頁	
(中山紀子)	2002	トルコ―世俗化，イスラム，女性の相互関係	『地域研究入門』(古今書院)	129-141頁	

鳴海邦匡・小林茂	2006	近世以降の神社林の景観変化	歴史地理学48-1	1-17頁
西河悦子	1999	地域の何を見るか「山の神・野神信仰－滋賀県日野川・野洲川流域」	地理44-5	44-49頁
新田浩延	2000	常陸総社宮例大祭の空間構造―住民の参加形態を指標に	茨城地理1	3-16頁
野中　尚	2003	茨城県岩間町愛宕神社の信仰圏	茨城地理4	1-13頁
畑聡一郎	2002	葬儀と葬制の変化―愛知県日間賀島における両墓制の崩壊・火葬の受容	日本民俗学231	97-110頁
(原淳一郎)	2005	近世における参詣行動と歴史意識―鎌倉の再発見と懐古主義	歴史地理学47-3	1-23頁
(秀村研二)	2003	韓国社会とキリスト教	地理48-3	35-41頁
日比野光敏	2003	農村民俗行事の伝承と変容―栗東市大橋地区の「鮠取り神事」を事例に	『農村空間の研究(下)』(大明堂)	
廣本祥己	2004	那須岳白湯山・高湯山信仰の分布について	歴史地理学46-1	15-31頁
廣本祥己	2005	那須岳における近代の参詣習俗について	山岳修験35	69-80頁
藤田佳久・高木秀和	2006	南信州遠山郷の和田地区に「神様王国」をつくる基礎的研究	年報中部の経済と社会2005	187-206頁
藤村健一	2001	奥熊野の一村落における宗教の多様性とその要因	歴史地理学43-5	21-37頁
藤村健一	2003	新宗教教団・大本の聖地の建設と再建	地理48-11	29-35頁
藤村健一	2004	越前における真宗と村落社会―道場の変遷を中心に	歴史地理学46-1	1-14頁
藤村健一	2004	近年の英語圏における宗教の地理学的研究の動向―L・コンとR・W・スタンプを中心として	立命館地理学16	71-80頁
藤村健一	2005	宗教施設と社会集団との相互関係とその変化―福井県嶺北の寺院・道場の事例から	地理学評論78-6	369-386頁
藤村健一	2006	Problems with essentialism and constructionism in contemporary geographical studies of religion	Geographical Review of Japan, 79-5	251-263頁
舩杉力修	1997	戦国期における伊勢信仰の浸透とその背景―越後国蒲原郡出雲田荘を事例として	地理学評論70A-8	491-511頁
舩杉力修	1998	戦国期における伊勢神宮外宮門前町山田の形成―上之郷を事例として	歴史地理学40-3	1-22頁
舩杉力修	1999	伊勢神宮御師来田新左衛門家文書(１)　延宝五年江戸・関東御祓配帳(１)	社会システム論集4	1-23頁
舩杉力修	2000	伊勢神宮御師来田新左衛門家文書(２)　延宝五年江戸・関東御祓配帳(２)	社会システム論集5	1-31頁
舩杉力修	2001	伊勢神宮御師来田新左衛門家文書(３)　貞享二年江戸御祓配帳	社会システム論集6	19-52頁
舩杉力修	2004	伊勢神宮御師来田新左衛門家文書(４)　(寛永一一年)御参官人帳	社会文化論集(島根大学)1	1-29頁
府和正一郎	2002	七尾市の青柏祭にみる伝統の継承と変容	自然と社会68	10-22頁
細野　聡	2006	日常の先祖祭祀に見る地域性―線香の利用を事例として	熊本地理17	1-13頁
(堀内　勝)	2002	アラブ・イスラム世界	『地域研究入門』(古今書院)	119-128頁
松井圭介	1997	福島市における祭礼空間の変容	地域調査報告(筑波大)19	119-127頁
松井圭介	1998	Reexamination of Recent Studies on the Geography of Religion in Japan	Annual Report of Institute of Geoscience, The University of Tsukuba, 24	7-12頁
松井圭介	1999	A Study on the Religious Sphere of the Kanamura Betsurai Shrine,Ibaraki	Annual Report of Institute of Geoscience, The University of Tsukuba, 25	5-11頁
松井圭介	1999	Regional Characteristics of the Belief in the Kanamura Betsurai Shrine between the Inner and Outer Areas	Geographical Review of Japan (Ser.B), 72B-1	1-22頁
松井圭介	1999	金村別雷神社信仰の地域的特性	筑波大学人文地理学研究23	39-58頁
松井圭介	2000	カリスマの継承からみた天理教系教団の分派形成―場所の宗教と天啓者の宗教	筑波大学人文地理学研究24	55-76頁
松井圭介	2001	つくば市豊里地区における金村信仰の受容形態	筑波大学人文地理学研究25	61-75頁
松井圭介	2003	『日本の宗教空間』	古今書院	
松井圭介	2003	宗教地理学の動向と課題	『21世紀の人文地理学展望』(古今書院)	447-459頁
松井圭介	2003	信仰間競合から見た金村信仰圏の空間的意味	人文地理学研究(筑波大学)27	49-70頁
松井圭介	2003	民衆宗教にみる聖地の風景	地理48-11	36-42頁
松井圭介	2005	ツーリズムの影響にともなう聖地管理の課題―Shackley, M. : Managing sacred sites を手がかりとして	人文地理学研究(筑波大学)29	159-169頁
松井圭介	2005	信仰圏研究の成果と展望―金村別雷神社信仰を事例として	歴史地理学47-1	23-39頁
松井圭介	2006	観光戦略としてのキリシタン―宗教とツーリズムの相克	人文地理学研究(筑波大学)30	147-179頁
松尾忠直ほか	2006	埼玉県江南町における神社の祭りと住民参加	地域研究(立正地理学会)46-2	43-59頁

松本　司	2004	祭祀空間と交通路―相模国北西部「鎌倉古道」の「三角辻」をめぐって	歴史地理学46-1	65-78頁	
三木一彦	1998	山間村落における信仰集団存立の地域的基盤―江戸時代の秩父郡大野村を事例として	歴史地理学40-2	2-21頁	
三木一彦	1999	壇廻と奉納の記録にみる江戸の三峰信仰―19世紀前半に焦点をあてて	山岳修験24	81-88頁	
三木一彦	2001	江戸における三峰信仰の展開とその社会的背景	人文地理53-1	1-17頁	
水元　繁	2000	堺市における線香産業の発展と再編成	瀬戸内地理9	19-29頁	
目崎茂和	2001	伊勢・神宮―聖なる結界の地理風水	地理46-7	44-51頁	
森島光一	2004	男体山信仰と祭礼	宇大地理7	26-37頁	
森　正人	2001	場所の真正性と神聖性―高知県室戸市の御厨人窟を事例に	地理科学56-4	42-61頁	
森　正人	2001	遍路道にみる宗教的意味の現代性―道をめぐるふたつの主体の活動を中心に	人文地理53-2	75-91頁	
森　正人	2002	近代における空間の編成と四国遍路の変容―両大戦間期を中心に	人文地理54-6	1-22頁	
森　正人	2005	「空前絶後！」四国八十八ヶ所霊場出開帳―スペクタクルとしての巡礼と巡礼空間の生産	人文論叢(三重大学)22	65-80頁	
森　正人	2005	『四国遍路の近現代―「モダン遍路」から「癒しの旅」まで』	創元社		
森　正人	2005	節合される日本文化と弘法大師―1934年の「弘法大師文化展覧会」を中心に	地理学評論78-1	1-27頁	
安田喜憲	1997	東西の神話にみる森のこころ	日本研究16	101-123頁	
安田喜憲編	2006	『山岳信仰と日本人』	NTT出版		
山口泰代	1997	聖地的山里室生の景観の構造―人を魅了する風景へのアプローチ	人文地理49-2	63-78頁	現姓：川合
山崎達夫	2004	地域を考える地形図読図7　出羽三山信仰―羽黒山と山岳宗教集落の立地	地理49-11	81-89頁	
山本健兒	1997	在独トルコ人への「差別」とイスラム組織―２つの著書に対する論評	地理学評論70A-3	131-155頁	
吉川真生・伍業和	2006	クアラルンプールにおける民族・宗教・文化の多様性	房総研究43	13-21頁	
吉永智子	1999	日光市における門前町の変遷	宇大地理2	20-28頁	
渡邊秀一	2003	東西本願寺門前町における旅館業の分布と特色―明治・大正期を中心に	文学部論集(佛教大学)87	31-47頁	
渡辺康代	1999	近世城下町における祭礼形態の変容―下野国那須郡烏山を事例として	地理学評論72A-7	423-443頁	
渡辺康代	2002	宇都宮明神の「付祭り」にみる宇都宮町人町の変容	歴史地理学44-2	25-44頁	
渡辺康代	2006	近世城下町桑名における祭礼の変容―住民の生活文化としての祭礼へ	歴史地理学48-4	1-18頁	

注１：配列は，著者の姓の五十音順，同じ著者の場合は発行年順である。
注２：括弧つきの著者名は，非地理学者を示す。
注３：共著の場合は，筆頭著者欄にだけ文献名を記した。
注４：備考欄の「追加分」とは，1996年以前の文献で，前稿に挙げなかったものである。